

スペイン・フェミニズムの先駆者
コンセプション・アレナルとエミリア・パルド・バサン

砂山 充子

目 次

はじめに	2
1 コンセプション・アレナル	4
2 エミリア・パルド・バサン	9
むすびにかえて 第一世代のフェミニストとして	14
編集後記	20

はじめに

「女性が小説なり詩なりを書こうとするなら、年に 500 ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋を持つ必要がある」

ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』

ヴァージニア・ウルフ（1882-1941）は、1928 年にケンブリッジの女子学生寮での講演会でこう発言し、女性の経済的、精神的自立の必要性を主張した。19 世紀のスペインで、ウルフ同様に著作や講演を通じて、女性の置かれている状況を非難し、その改善を主張した 2 名の女性がいた。刑法学者のコンセプション・アレナル(Concepción Arenal 1820-1893)と自然主義の作家エミリア・パルド・バサン(Emilia Pardo Bazán 1851-1921)である。スペイン女性史の先駆的な著作を書いたカンポ・アランヘ伯爵夫人は、スペインには、フェミニズムと呼べるものが存在しなかったと述べたあとで「確かにコンセプション・アレナルやエミリア・パルド・バサンのような人物はいた。しかし、彼女らは砂漠の叫び声のようなものだ」¹ と評している。すなわち、孤立していたということである。

スペインにおいて、参政権を初めとする女性の諸権利が実現したのは、1931 年に成立した第二共和国時代であった。1931 年 6 月に召集された憲法制定議会での議論の後に、12 月に女性参政権（第 36 条）、婚姻における男女の平等（第 43 条）など男女平等の精神を織り込んだ第二共和国憲法が公布された。翌 1932 年 2 月には、離婚法も成立して離婚が容認された。第二共和国における女性の権利獲得、特に参政権獲得は、女性の側からの要求によってではなく、男女平等という原理原則を重視する左派の一部と教会の影響力による勢力伸長に期待した機会利用主義の右派の思惑から実現した。当時の女性の大部分は、教育水準も低く、熱心なカトリック信者であり、権利獲得の意識を強くもっていたとは言いがたい。第二共和国時代の法制面における男女平等は、女性の側からの要求によって実現したのではなく、自由主義、民主主義の実現を目指す進歩的な政治家たちによって、いわば「上から」与えられた平等であった。そして、女性参政権実現も、イギリスやアメリカ合衆国でそうであったように、女性の側からの要求が高まった結果としてではなく、原理原則を重視した左派の一部と教会の影響力による勢力奪回を目指した右派の支持によって、結果として実現したのであった。

スペインにおけるフェミニズムの起源は、制度面から考えれば第二共和国時代に求められる。

¹ Condesa de Campo Alange, (María Laffitte), *La mujer en España:cien años de su historia 1860-1960*, Madrid, Aguilar, 1964. p. 9. この表現はアレナルの著作である *La voz que clama en el Desierto* から取られたものと思われる。

第二共和国が成立するまではスペインではフェミニズムは存在していなかったとまで結論づける研究者もいる。² ただし、フェミニズムを女性の地位向上へ向けての試みと広義に定義すれば、その起源は 19 世紀後半のクラウシストと呼ばれる文化面での主として女子教育の向上を目指した改革に求められる。³

1868 年から 74 年までのスペイン史上で「革命の 6 年間」と呼ばれている時代を経て、1874 年に起こった王政復古の結果、自由主義を信奉する知識人たちが大学から追放された。彼らは自らの教育理念を実現するために「自由教育学院」という私立学校を創設した。この学校では、それまでとは違って男女共学が実現した。時期を同じくして、それまでの「家庭の天使」というステレオタイプではない「新しい」女性を育成していく必要性を訴えるスペイン・フェミニズムの先駆者の女性たちが現われた。彼女たちはウルフの述べた「500 ポンドの年収と自分だけの部屋」すなわち、瞑想する力である 500 ポンドの収入と、自分で思考する能力であるドアの鍵を持っていた。本稿ではこうした女性たちの第一世代とも呼べる二人の女性、エミリア・パルド・バサンとコンセプション・アレナルの思想について、彼女たちの著作から考察していく。彼女たちが当時のスペイン女性のおかれていた状況をどのように捉え、どのような方策にこうした女性問題解決の糸口を探っていたのかを考察する。

アレナルとパルド・バサンは、ともにスペイン北西部のガリシア地方の出身であった。ガリシア地方はスペインの後進地域であるがゆえに、女性も男性と同様に農作業等の重労働に従事せざるを得ず、そのため女性の地位は比較的高かったと指摘されている。⁴ そのこととアレナルやパルド・バサンがこの地域の出身であることは無関係ではないだろう。特に 19 世紀にガリシア地方から多くの女性作家が輩出されている。詩人のロサリア・デ・カストロ(Rosalía de Castro)もガリシア出身である。⁵ 19 世紀には女性であるということが出版の障害になると考え、フェルナン・カバジェロ (Fernán Caballero) (本名は Cecilia Böhl de Faber) やロサリオ・デ・アクーニャ(Rosario de Acuña)のように男性名をペンネームとして用いていた女性もいたのに対し、アレナルとパルド・バサンは本名で自らの言葉に責任を持って執筆活動を行った。

² Capmany, María Aurèlia, *El feminismo ibérico*, Barcelona, oikus-tau, 1970.

Capel Martínez, Rosa María, “El voto femenino durante la II república”, en *Tiempo de Historia*, núm.19, Madrid, junio, 1976. など。

³ この点については、拙稿『スペイン女子教育の進展—新しい教育とフェミニズムの担い手たち』専修大学人文科学研究月報 221 号 2006 年 1 月を参照。

⁴ Carr, Raymond, *España 1808-1939*, Madrid, Ariel, 1970.

⁵ ガリシア地方出身の女性達に関しては Marco, Aurora, “Mujeres gallegas del XIX: Esas desconocidas”, en Flecha, C., Torres, I. (eds.), *La mujer nueva, realidad, respuestas nuevas*, Madrid, Fundación Castroverde, 1993. が取り上げている。

1 コンセプション・アレナル

コンセプション・アレナルは、1820年、ガリシア地方のエル・フェロルで、自由主義を信奉する軍人の家庭に生まれた。その人生については、あまり詳細なことはわかっていない。晩年に彼女自身が書きかけの原稿や私信などを処分してしまったからである。⁶ 彼女の生きた時代、すなわち1820年から1893年の間にスペインは度重なる戦争や政変を経験する。3度のカルリスタ戦争、モロッコ戦争、それにスペイン史における大きな転換点である1868年革命もおこった。政治的不安定は人々の生活に大きな影を投げ落とすことになる。貧困と病苦にあえぐ生活である。コレラの流行が相次ぎ、平均寿命はきわめて短かく、子供達は幼少時から働かざるをえなかった。中南米の植民地では奴隷制が廃止され、男子普通選挙が制定された。文化面では、クラウシスモ⁷が進歩的な知識人の間に広がり、彼らが中心となって新たな方向性をもった学校「自由教育学院」が設立された。アレナルもクラウシストたちと協力して、文化面、法制面での改革に寄与した。アレナルはクラウシスモの思想自体には惹かれなかったが、クラウシストたちの目指す教育や法制面での改革には同調し、自由教育学院の機関誌に頻繁に寄稿している。1893年アレナルの死の直後の機関誌は、次のように彼女の死を悼んでいる。「(自由教育) 学院は最も熱心な協力者の一人を失った。機関誌は今の時代を代表する女性であり、我々の友人であった貴重な協力者を失ったことになる。」⁸アレナルに関しては、自由教育学院の機関誌のみならず、女性組織の機関誌やその他女性向けの新聞などに、頻繁に紹介記事が掲載されている。⁹

アレナルについて、自由教育学院の中心人物の一人のアスカラテ(Gumersindo de Azcárate)は比類のない著述家であり、「スペイン最初の刑法学者、社会学者、そして国際法の専門家でありながら、女性であるというだけで、その被るべき榮譽を受けなかった」¹⁰と述べた。オビエド大学の法律学教授で改革運動の推進者で、各国のフェミニズム運動の状況を紹介し、スペインのフェミニズム運動との比較をした『フェミニズム』¹¹を執筆したポサーダ(Adolfo Posada)は、彼女を「高名な著述家で聖なる女性」と呼び、フランコス・ロドリゲスは、彼女を称して「偉大なる道徳者であり、偉大な心理学者、永遠なる弱者の擁護者で、常に、世の中の利己的な愚

⁶ 彼女の人生についての近年の研究成果として、Lacalzada de Mateo, María José, *Mentalidad y proyección social de Concepción Arenal*, Zaragoza, 1994. をあげておく。

⁷ ドイツの哲学者カール・クラウゼに影響を受けた汎神論に基づく思想で、スペインの知識人たちに大きな影響を与えた。スペインにはサンス・デル・リオによって紹介された。

⁸ Joaquín Sama による記事。Marsa Valcells, Plutarco, *Concepción Arenal y la Institución Libre de Enseñanza*, Madrid, Cuadernos de Olalla, 1992.

⁹ *La Voz de la Mujer*, *Mundo Femenino* など。 *La Voz de la Mujer* では *La mujer del porvenir* が連載された。

¹⁰ Francos Rodríguez, José, *La mujer y la política españolas*, Madrid, Editorial Pueyo, 1920, p. 123.

¹¹ Posada, Adolfo, *Feminismo*, Madrid, 1994. (初版は1899年)

考に反対する人道主義的な立場をとった」¹²と表現している。当時の多くの自由主義知識人はアレナルを非常に高く評価していた。それは、単にスペイン人にとどまらない。アルゼンチンのフランシスコ・マニャクは一冊の本を彼女に捧げて書き、19世紀の最も偉大な女性だと最大級の賛辞を送った。ドイツ、アメリカ、イタリアなどの知識人もアレナルを賞賛している。彼女を尊敬し、彼女からの影響を受けたのは同時代人に留まらない。カサス・フェルナンデスはアレナルは「偉大なインテリで、特権的な才能をもった人物であったが、なによりもまず素晴らしい心を持った人物であった」¹³と評している。第二共和国憲法制定議会の議員で、女性参政権実現を主張したクララ・カンボアモールは、フェミニズム運動の仲間達と尊敬するアレナルの像を建立しようと東奔西走した。アレナルの像はマドリードの大学都市に隣接する西公園に建っている。1931年に女性として初めて最高裁に弁護士として出廷し、第二共和国時代には議員も務めたビクトリア・ケントはアレナルの意志を継いで刑法の改革、特に刑務所の状況改善に尽力した。1994年に創刊された女性史研究雑誌も彼女の名前をとって *Arenal* と命名された。

アレナルは1841年にマドリードのサン・ベルナルド通りにあった大学の法学の授業に、男装して潜り込んだというエピソードを持つ人物である。弁護士になりたいという幼少時からの夢を実現すべく、マントと帽子で顔を覆ってひそかに授業に参加したと言われている。しかし、見つかってしまい、試験を受けさせられ、例外的に出席を認められたという。この点について、確証は得られていないが、女性の無条件での大学進学が容認されたのが1910年であること、文学者や知識人たちの座談会にも男装で参加していたらしいことなどから考えておそらく正しいのではないと思われる。彼女は1848年に大学で知り合ったとされるフェルナンド・ガルシア・カラスコと結婚する。夫は結婚後まもなく病に倒れるが、アレナルは夫の闘病中から、夫が執筆していた『ラ・イベリア』(La Iberia)という進歩主義的な新聞に寄稿し、その死後も執筆を続けた。しかし、後に社説記事に執筆者の署名が必要になった際に彼女は解任されてしまう。いくら進歩的なメディアであっても女性名を載せるわけにはいかないという当時の風潮が伺える。

アレナルは非常に多作の女性で、様々な新聞、雑誌にも数々の記事や論文を発表している。アレナルの女性問題に関する初めてのまとまった著作は『未来の女性』(La mujer del porvenir 1861年執筆。出版は1868年)である。この本でアレナルは、スペイン女性の文化的、心理的抑圧状況を分析した。アレナルは女性の能力が男性よりも劣っていることはないと言明している。生物学的観点から、すなわち、女性は脳ミソの量が男性よりも少ないので、男性よりも知的能

¹² Francos Rodríguez, José, *op.cit.*, p. 124.

¹³ Casas Fernández, M., *Concepción Arenal : Su vida y su obra*, Madrid, Librería General de Victoriano Suárez, 1936, p. 10.

力が劣っているという見解は、ドイツ人大脳生理学者のガル(Franz Joseph Gall 1758-1828)らによって主張されていた。アレナルは女性の知的能力が劣っているとすれば、それは持って生まれた特性ではなくて、女性に対して十分な教育がなされていなかったからだと反論する。こうした誤った見解は、まず何よりも女性にとって、第二に男性にとって、そして第三に社会にとって、悪影響を与えていると批判する。¹⁴ 刑法学者の彼女は、当時の法律の不平等をも指摘している。それは民法においては、女性は、特に既婚者の場合は、未成年者と同じく法的無能力者と規定されているのに対して、刑法においては、男性と同じように裁かれ、場合によっては、女性の方が罪は重いという点である。¹⁵ 女性の知的劣等論を論破した上で、彼女は女性に向いている職業をあげている。アレナルによれば、女性は「たくさんの体力を必要とするのではなく、女性としてのやさしさを損なわないですむ」いかなる仕事にも従事できるという。具体的には、は薬剤師、産婦人科などの女性むけ医師、文学者などが女性に向いている職とされた。男性に向いている職業は、外科医、軍人、裁判官などだった。¹⁶ その中で興味深いのは、女性の方が男性よりも思いやりが深いという理由から、聖職には女性の方が向いていると主張している点である。ただしこの点に関しては、後の著作『家庭の女性』(La mujer en su casa 1883年)では見解を異にしている。『家庭の女性』では女性に聖職を求めてはいない。この点についてパルド・バサンは、おそらくはそうした主張が奇妙であることを理解したのか、もしくは聖テレサに代表されるような女性聖人たちの行動に大きな影響を与えていたのは、女性としての愛情や慈悲深さではなくて、ドグマ的かつ哲学的なものであったのを理解したのだろうと解釈している。¹⁷ アレナルは、女性は知性においては男性と同等であるが、精神面においては、男性よりも優れていると考えていた。

アレナルが『未来の女性』で主張しているのは、以下の3点に集約できる。まず、男性と女性の知的能力が、高度なレベルの思想をのぞいては、対等であることを認め、その結果として、肉体的な力が必要とされたり、女性の感性と合いないもの以外のすべての職業に女性の参加を認めること。第2点としては、家庭のみが女性にとって理想的な場であるとの社会通念を超越して、自身もそうであったように女性が家庭の仕事をおろそかにせず、すべての社会生活に、積極的かつ有益な方法で参加すること。そして第3点としては、政治及びに指導的立場からの女性の排除である。アレナルは女性への政治権付与を求めてはいないが、それは政治においては、かならずしも好ましくはない熱情や権力争いがあり、それが女性の感性とは合いな

¹⁴ Arenal, Concepción, “La mujer del porvenir”, en Armiño, Mauro (ed.), *La Emancipación de la mujer en España*, Madrid, Júcar, 1974, p. 127. この本には Estado actual de la mujer en España, La educación de la mujer, El trabajo de las mujeres, La mujer del porvenir, La mujer de su casa が所収されている。

¹⁵ *Ibid.*, p. 104.

¹⁶ *Ibid.*, pp. 157-164.

¹⁷ Pardo Bazán, Emilia, *La mujer española y otros artículos feministas*, Madrid, Editora Nacional, 1976, p. 187.

いものだと考えたからである。

1884年に書かれた「スペインの女性の現状」¹⁸では、女性労働の実態を明らかにしている。アレナルはこの論文の冒頭でスペイン女性を「不完全な労働者」と呼んでいる。¹⁹単に男性との比較ではなくて、女性の仕事とされている裁縫、装飾などでも、他国の女性よりも劣っているという。スペインの女性労働者は劣悪な環境で健康を損ないながら、低賃金での労働を余儀なくされていると指摘する。アレナルは、その原因を女性の教育不足、社会の慣習、人々の無理解及びに女性への尊敬心の欠如の4点に求めている。²⁰アレナルは女性の置かれている悲惨な状況が、主として女性の教育不足によるものだと認識を深めていく。

そうした問題意識から書かれたのが、1892年に開催された教育会議で発表された「女性の教育」と題する論文である。彼女自身は体調不良のためこの会議に出席はしなかったが、講演録が発表された。²¹同会議に出席していたバルド・バサンは、会議の終了時の講演で、「皆さん本当に残念ながら、私たちの先生であり、私たちの尊敬と賞賛を受けるに値するコンセプト・アレナルは、今日この場にいません。(中略)けれども、彼女の心はここにあります」²²と述べている。この論文でアレナルは、「男女に同じ教育を与えるべきである、法律や習慣により、差別を受けている女性の教育の必要性はより急務である、女性の人格を認めないことが女性への教育、職業従事への障害となっている」²³と述べ、女性の教育の必要性を主張している。「・・・女性がまず必要としているのは、みずからの人格を認めることである。それはどのような状況にあっても、すなわち、独身でも、既婚者でも、寡婦であっても、同じである。皆が果たすべき義務を負っており、要求すべき権利を持ち、誰にも頼らない威厳を持ち、やるべき仕事があるのだということを自覚すべきである。そして、人生を真に大切なものとして受けとめるべきである」²⁴と語る。

1883年に執筆された『家庭の女性』は、アメリカやイギリスでのフェミニズム運動の進展を背景として執筆されたもので、女性の解放が社会問題として分析されている。この著作では、女性には家庭以外にも課された仕事があると主張している。この時期は、スペインでクラウシ

¹⁸ この論文は Stanton, *The woman question in Europe*, Putnam's Sons, New York, 1884. のために書かれ、スペインでは *Boletín de la Institución Libre de Enseñanza*, (自由教育学院の機関誌) 31-8-1895 に発表された。

¹⁹ Arenal, Concepción, "Estado actual de la mujer en España", en Armiño (ed.), *op.cit.*, p. 28.

²⁰ *Ibid.*, p. 30.

²¹ Pardo Bazán, Emilia, "Conclusiones de la memoria leída en el Congreso pedagógico, el del 17 de octubre de 1892", en Pardo Bazán, *op.cit.* 彼女がこの会議に出席したと述べている研究もいくつか見られるが、それは誤りである。例えば Roig, Mercedes, *La mujer y la prensa: desde el siglo XVII a nuestros días*, Madrid, 1977. Fagoaga, C., Saavedra, P., *Clara Campoamor*, Madrid, 1981. p. 25. フェゴアガの記述はカンボ・アランへのものに依拠しているが、カンボ・アランへは、「彼女(アレナル)の報告が読まれた」と記述しており、アレナルが出席しているとは書いてはいない。Campo Alange, *op.cit.*, p. 161.

²² Pardo Bazán, Emilia, *op. cit.*, p. 110.

²³ Arenal, Concepción, "La Educación de la mujer," en Armiño, *op.cit.*, p. 65.

²⁴ *Ibid.*, p. 67.

ストたちのイニシアティブで女子教育が開始された時期とも重なる。『家庭の女性』は、自由教育学院のメンバーの中で、女性を擁護したポサーダやラファエル・トレス・カンポス(Rafael Torres Campos)らに多大な影響を与えたとされている。²⁵ この著作は1861年に執筆された『未来の女性』とは、微妙にトーンが変わっている。『未来の女性』においてのように、女性に聖職を求めてはいないことは既に指摘したが、男女の能力が同等だという点に関しては、疑問の余地が残ると述べている。自らが女子教育の必要性を声高に叫び、女性の置かれている状況の改善のために尽力してきた数十年間の間に、状況がほとんど変わらないのを目の当たりにして、同時代の女性に対する疑念が大きくなってきたものだと思う。それでも女性にも男性と同じ教育をすべきだという強い信念を持っていた。

アレナルの関心は、単に女性だけではなく、囚人や子供といった社会的弱者に向けられていた。それは、彼女が熱心なカトリック信者であったこととも関係している。当時のスペインで、自由主義者でありながら、カトリック信者であることはなかなか難しいことだった。マルサ・バルセルスは、彼女はスペインにおける「社会的カトリック」の創設者であると述べ、アレナルを聖テレサやマザー・テレサに並び称される人物であるとも位置づけている。²⁶ 彼女はカトリックの立場から社会的弱者に暖かい手を差し伸べた。彼女のこうした側面は、例えば『愛徳の声』(La Voz de la Caridad)という新聞の創刊、発行に現われている。1870年から14年間にわたって発行されたこの新聞から得られた利益は、貧しい家庭に贈られた。²⁷

彼女はフェイホーの著作集のあとがきで「修道女」について批判的に語ったために、カトリック教会から「異端」の烙印を押されたこともある。修道女、特に隠遁修道会に属する修道女は若いときから友人や家族から隔離され、社会性が欠如すると批判した。「修道女は『キリストの妻』だとされるが、これは半ば馬鹿げていて神を冒瀆している。(中略)彼女たちは姉妹でも娘でも母親でも妻でもなく、心を砕かれた状態のため、精神の成長のために必要不可欠な要素が不足している」²⁸と厳しく批判した。

また、1861年には王立法学アカデミアに「福祉、博愛、慈善」というタイトルの論文を送り、賞を授賞している。これは王立アカデミアで女性が授賞した初の例であった。²⁹ 福祉とは病院

²⁵ Febo, Guiliana di, “Los orígenes del debate feminista en España: La Escuela krausista y la Institución Libre de Enseñanza”, en *Sistema*, núm. 12, Madrid, enero, 1976.

²⁶ Marsa Vancells, Plutarco, *concepción Arenal y la Institución Libre de Enseñanza*, madrid, Torreznos, 1992. p. 21.

²⁷ アレナルは、この新聞だけで500以上の記事を執筆している。Marrades, María Isabel, “Feminismo, prensa y sociedad en España”, en *Papers: Revista de Sociología*, Núm.9, Barcelona, Universidad Autónoma de Barcelona, 1978, p. 110.

²⁸ Santalla, ManuelaによるBlanco-Amor, E., *Fray Benito Jerónimo Feijóo: antología popular, con Epílogo de Concepción Arenal*, El Centro Gallego de Buenos Aires, 1877からの引用。“La condición femenina en Concepción Arenal”, *Arenal*, Vol.1, núm. 1, 1977, p. 110.

²⁹ アカデミアでの男女差別を知っていたアレナルは、息子の名前で投稿した。受賞したのが10歳の少年だ

にベッドを贈り、博愛とは病人に寄り添い、慈善とは手をさしのべることだという精神は、1860年に執筆された「貧しい人を訪問する人の手引」(Manual del visitador del pobre)とのタイトルの著作にも貫かれている。本書は仏・独・英・伊・ポーランド語に翻訳され、彼女の著作で最も読まれたものの一つである。1863年には、彼女のために作られたポストである女性刑務所の訪問委員に任命された。刑法学者としては「罪を憎み、犯罪者に同情せよ」という有名な言葉を残し、この言葉通りに自らも行動した。アレナルは理論を実践する人であった。彼女にとって、刑務所とは罰を与える場所ではなく、労働によって囚人を罪から解放する場所であった。彼女が訪問した刑務所の女性囚のなかには、多くの売春婦たちがいた。アレナルは1868年には女性の社会復帰センターの視察官となり、囚人や売春婦となった女性達に教育をし、社会復帰を手助けした。

アレナルはクラウシストたち同様、一貫した平和主義者であった。刑法学者としては死刑に反対し、あらゆる暴力や戦争に反対だった。彼女は第3次カルリスタ戦争の際、赤十字のマドリッド事務局長に任命された。息子が従軍していたこともあり、戦場に同行し、戦争の悲惨さを目の当たりにした。アレナルは女性を初めとする社会的弱者の救済のために、ときにはフェミニストとして、そしてときには平和主義者として、刑法学者として、19世紀のスペインで声高に「叫び」続けたのである。

2 エミリア・パルド・バサン

エミリア・パルド・バサンは、1851年にガリシア地方のラ・コルーニャに生まれた。自由主義者の父親は両性の間には違いがないとの認識を持っていた。貴族の家庭に生まれたエミリアは、幼少時から読書が大好きな少女であった。家庭には多くの蔵書があり、彼女は様々な書物を読んで育った。ある時期に父親から何でも好きな本を読んでいいとの許可が出るが、唯一の例外がフランス語で書かれた本であった。しかし、皮肉なことに彼女が最も気に入り、またその文学において大きな影響を受けたのは、フランスの自然主義小説家のゾラの作品であった。知名度や文学的才能という点では、パルド・バサンはアレナルを上回っており、文学者としての評価も高い。ただし、あまりにはっきりと物事を述べる姿勢から、彼女の周囲には敵も多かったという。

パルド・バサンは、多くの小説や論文を通じて、当時のスペイン女性の状況を描いている。1890年5月から8月にかけて、「近代スペイン」La España Moderna 誌上に、「スペインの女性」

とわかり、執筆者はコンセプション・アレナルであることが判明した。アカデミアでの男女差別問題はパルド・バサンも取り上げている。

というスペイン女性の現状について述べた論文を発表した。³⁰ 彼女はこの論文で、当時のスペイン女性の置かれていた状況を、属する社会階層と地方によって分類している。パルド・バサンによれば、従来、権利を与えられていないという意味で同じ地点にいた男性と女性の距離が広がったという。なぜならば、近代化の過程で男性のみが教育の自由、信教の自由、参政権といった様々な改革の恩恵を享受したからである。多くの自由主義者の男性にとって、理想とする女性像は、熱心なカトリック教徒で政治に興味など示さない女性であった。パルド・バサンはこんなエピソードを紹介している。ある集会で、共和主義、自由主義を信奉する男性に出会った彼女は、彼に「どうして奥さんは来ていないのですか」とたずねたところ、その男性はこう答えたという。「妻ですか？ 妻は幸いなことに自由主義者ではないのです」³¹。社会階層によって、貴族・中産階級・労働者階級と分類された女性達の特徴は以下のようなものである。貴族階級の女性は、一般的なイメージとしては、軽薄で、モードの店と美容院に通い、美しく着飾るものことのみに関心を払い、「男性によって望まれている豪華な家具」としての役割に留まっていると思われている。しかし、中には文学や芸術に造詣が深い女性もいるし、慈善事業に携わっている女性たちもいる。ただし、この階級の子供たちが受ける教育が問題であると述べている。それは彼女自身の経験から生まれた認識である。上流階級子女の教育の問題点として、第一に表層的でレベルが低く、第二点としては、こうした家庭の子供達の教育に携わる家庭教師の多くが外国人³² であるために、ともすればスペイン人の特性を失いかねないという点をあげている。中産階級の女性たちにとって、人生の唯一の目標は結婚することである。³³ 女優のような職業についている女性でさえ、結婚と同時に仕事をやめる場合が多く、劇作家たちは嘆いているという。中産階級の女性達が受ける教育は、表面的で飾りとしての教育であった。中には結婚生活に必要な最低限の教育すら受けていない女性もいる。中産階級の女性をパルド・バサンは上品ぶっついでながら下品であると特徴づけている。中産階級の女性の関心事は貴族階級の女性のファッションや立ち振舞いであると指摘している。上流階級の女性が出かける所へ出向いて行ったり、雑誌の記事などから、誰彼がどんな服装をしていて、どんな宝石をつけていたかまでを、微に入り細に入り探っていたという。パルド・バサンはこうした振舞いを批判

³⁰ この論文はロンドンの *Fortnightly Review* のために前年の 1889 年に執筆したものであった。Pardo Bazán, Emilia, *op. cit.*, p. 25.

³¹ Pardo Bazán, Emilia, *op. cit.*, p. 34.

³² 当時のスペインの上流家庭では、イギリス人の家庭教師をつけるのが一種の流行であった。貴族の家庭に育ったコンスタンシア・デ・ラ・モーラも、イギリス人の家庭教師について勉強していた。Mora, Constanca de la, *Doble Esplendor*, Barcelona, Critica, 1977.

³³ Pardo Bazán, Emilia, *op. cit.*, p. 50. 当時、医師のような専門職に就く女性も出現してはいたが、それは例外であった。当時の数少ない女性医師で、1882年に女性として最初に博士号をとったマルティナ・カステイス (Martina Castells) は、若くして出産時に命を落としてしまった。彼女の体は知的な活動のために破壊されたと言われていた。Capel Martínez, Rosa María, *El trabajo y la educación de la mujer en España 1900-1936*, Madrid, Ministerio de Cultura, 1986.

的に語り、その要因を自立心の不足に求めている。中産階級の女性の関心がこうしたことに向いてしまうのには、夫の側にも責任があるのだと指摘する。中産階級の男性は自分の妻が外国語や音楽、それに絵画といったものに興味を持つことはいっこうに構わないと考えていた。しかし、それはあくまでも趣味としての域を出ない場合に限ってであった。労働者階級の女性達の特徴は、地域によって大きく異なっている。カタルーニャ女性はもっとも近代的であり、アンダルシアの女性は信心深く多少臆病なところがあり、バスクの女性は政治への関心が強いという。バスクの女性はジャン・ジャック・ルソーの述べているように結婚するまでは慣習にとらわれずに生活するが、結婚すると夫に対して忠実な妻になるのだという。パルド・バサンは、最もスペイン的なものを保っているのは、マドリードの女性であると考えていた。当時のスペインの女性労働者については、「スペインのほとんどの地域で女性は男性の農作業を手伝っている。法律を初めとして、労働以外の場では否定されている男女の平等が、農業労働者や日雇い労働者、それに小作人たちの悲惨な状況下では実現している」³⁴と非難する。自らの出身地であるガリシアの労働者階級女性たちの状況について彼女は次のように語る。「私の故郷のガリシアでは妊婦や幼子を抱えた母親たちが畑を耕したり、トウモロコシや小麦の刈り取りをしたり、牧草を刈ったりしているのを目にする。そんなに重労働をしても女性達はいっこうに抗議の声をあげたりはしない」³⁵とガリシアの女性への思いを綴っている。こうした労働者階級の彼女達を家庭から引きずり出し、「解放」したのは「必要性」であったのだと皮肉をこめて語る。

パルド・バサンは文学作品においても女性達の悲惨な状況を語ったり、自らが理想とする女性像を描いたりしている。ラ・コルーニャのタバコ工場を舞台にした『女性弁士』(La Tribuna)では、新聞を皆に読んできかせる係のアンパロが主人公である。アンパロは次第に政治に関心を抱くが、当然のことながら、周囲からはよく思われない。この作品はステレオタイプの性別役割分担に疑問を投げかけたものである。パルド・バサンもまたアレナル同様に、死刑に反対し、死刑を取り扱った作品『礎石』(La piedra angular)を著した。この作品はイタリア語にも翻訳され、イタリアで大きな反響をよんだ。『ある独り者の思い出』(Memorias de un solterón)という作品³⁶では、男性を語り手としながら、両性の平等に基づいた結婚をめざす新しい女性像の青写真を打だしている。主人公のフェイータは、自立して生きていくことを目指す「新しい」女性である。この作品とベニート・ペレス・ガルドスの『トリスターナ』³⁷を比較研究したオールド

³⁴ Pardo Bazán, Emilia, *op.cit.*, pp. 69-70.

³⁵ *Ibid.*, p.70.

³⁶ この作品をはじめとするいくつかのパルド・バサンの作品については、磯山久美子「エミリア・パルド・バサン」高橋博幸、加藤隆浩編『スペインの女性群像』行路社 2003年 154-168頁を参照。

³⁷ ペレス・ガルドスが執筆し後にルイス・ブニエルが映画化した作品「トリスターナ」(公開時の邦題「哀しみのトリスターナ」)の主人公トリスターナは彼女をモデルにしたものだという。

ニェスは、フェイータとその夫マウロの結婚こそがパルド・バサンが理想とする結婚のかたちで、それはジョン・スチュワート・ミルと夫の死後、ミルの伴侶になるハリエット・タイラーのような両性の平等に基づく結婚形態であつたらうと指摘している。³⁸ パルド・バサンは 16 歳のときに結婚し、3 児をもうけているが、後に女性が物を書くことをよく思わない夫とは「離婚」する。³⁹ ただし、当時は今日的意味合いでの離婚は存在せず、「離婚」とは共同生活の停止、すなわち「別居」しか意味しなかった。つまり「離婚」したとしても、再婚することは出来なかったのである。パルド・バサンは、同時代の多くの男性文学者や知識人たちと深い友情で結ばれていた。時には臆することなく、彼らに論争を挑んだ。それが愛情にかわることもあった。彼女は文学者のペレス・ガルドスや実業家ラサロ・ガルディアーノと恋愛関係にあつた。それとは対照的に女性文学者たちとは一線を画し、交流をすることはなかった。ただし、同郷出身の先達コンセプション・アレナルには、深い尊敬の念を抱いていた。1893 年にはアレナルの逝去にあたり「コンセプション・アレナルとその女性に関する考え」⁴⁰と題した講演をし、女性に関する代表的な著作の 2 作『未来の女性』『家庭の女性』を紹介した。

パルド・バサンは、女性の解放のためには、女性を教育することこそが必要だと考えていた。そのために 1892 年に開催された教育会議で発言をしたり、同年に刊行を始めた「女性コレクション」(La Biblioteca de la Mujer)で、ジョン・スチュワート・ミルの『女性の隷属』、アウグスト・ベーベルの『女性と社会主義』などのフェミニズムの先駆的な著作をスペインに紹介した。彼女が望んでいた女性への教育とは、単に母親や妻として生きていくための女性の教育ではなく、女性自身に備わっている知性を高め、その能力を実際の仕事に生かすための完全な教育であつた。

パルド・バサンは、教育会議での講演で、教育の違いは階級によるよりも性別による違いの方がより大きいと述べた。そして、女性への教育は教育と呼べるものではなく、「てなずけ」にしか過ぎないと非難している。こうした「てなずけ」は、服従心、受け身な態度、従順さを女性に植え付けるために行われているのであると指摘する。⁴¹ 女性の教育は、将来子供にとって良き母親になるためではなくて、まず、個人として、女性自身のための教育であるべきだと主

³⁸ Ordóñez, Elizabeth, “Revising Realism: Pardo Bazán’s *Memorias de un solterón* in Light of Galdós’s *Tristana* and John Stuart Mill”, Noel Valis, Carol Maier (eds.), *In the Feminine Mode*, Lewisburg, Buckwell UP, 1990, pp. 146–173.

³⁹ 彼女が離婚という制度についてどう考えていたのかはわからない。カルメン・デ・ブルゴスが *Diario Universal* 紙上で離婚についてのアンケートを行ったときには、「離婚について特に考えていることはない」と回答している。

⁴⁰ Pardo Bazán, Emilia, “Concepción Arenal y sus ideas acerca de la mujer”, *Nuevo Teatro Crítico*, año III, febrero, 1893, núm. 26, pp. 269–304. *Nuevo Teatro Crítico* は彼女が主宰していた雑誌で、編集、執筆まですべて一人でやっていった。文芸批評や女性問題についての記事が掲載されている。すべての号が以下の URL で参照できる。http://www.cervantesvirtual.com/servlet/IndiceTomosNumeros?portal=0&Ref=13160

⁴¹ Pardo Bazán, Emilia, 1976, p. 92.

張している。パルド・バサンは、講演の結論を理論面と実践面から語っている。「最初の結論は理論面での結論である。(略)女性には、自分自身の人生があり、女性の務めはまず何よりも自らのためであり、(略)女性の教育の第一の目的は、女性自身の幸福と威厳を追求することであるべきだということを認識していただきたい。そのために、女性にも男性と同様の教育の権利を与えなければならない。第二の結論は、実践面でのものである。この会議の参加国すべて、特にこうした点で、これまであまり取り組みがなされてこなかったスペインにおいて、理論面での原則実現のために、たゆまない努力をしなければならない。まず、すべての公的な教育機関の門戸を女性に開放し、そこで得た知識を活用する職業機会を与えることが必要である。」⁴² この会議では、男女共学の是非も問われたが、パルド・バサンは当然のことながら、共学を支持した。マドリードの女子師範学校の校長カルメン・ロホは共学に反対した。

パルド・バサンもアレナル同様にまず女性に対する教育の必要性を訴えた。しかし、カルメン・ビジャサンテの指摘によると、彼女自身、後に諦めにも似た気持ちで、戦闘的なフェミニズムの姿勢からは離れていったという。⁴³ パルド・バサンは、翌年1893年には以下のように書いている。「知性という言葉をも、もし辞書の定義通りに、知的な能力、知識、理解と捉えるならば、女性にも知性は備わっている。しかし、もしそれ以上の高度なレベルの問題、例えば科学的真実である哲学的問題を理解し、それに基づいて行動するというのであれば、そうした「知性」を備えた女性はあまりいない。」⁴⁴ 同時代の女性達への不信感が次第に彼女の中で生まれてきたものと思われる。アレナルもパルド・バサンも、女性の置かれている状況を告発し、教育の必要性を説いたが、そうした主張をしていくなかで感じた、同時代の女性たちに対する不信感を生涯払拭することが出来なかったようである。これは、フェミニズム運動や労働運動の指導者の女性たちにも共通する点である。⁴⁵

王立言語アカデミアに欠員が生じた際に、パルド・バサンはメンバーとして推薦されたが、女性であるということで入会を果たせなかった。彼女の友人でもあったホアン・バレラは『女性とアカデミア』という小論で、女性がアカデミアのメンバーになることは、女性を「中性化」させることになり、女性本来の役割が果たせなくなると主張して女性の入会に反対した。⁴⁶ 彼

⁴² *Ibid.*, pp. 100-101.

⁴³ Febo による引用。Febo, *op. cit.*, p. 58.

⁴⁴ Pardo Bazán, Emilia, 1976, p. 187.

⁴⁵ 「スペイン女性全国連合」の機関誌の記述にも、同様のエリート意識が現われている。また、アナーキストのフェカデリカ・モンセニユも同様のことを述べている。モンセニユは回想録のなかで、自分は多くの人たちと厚い友情で結ばれていたが、その多くが男性であることについてなぜだろうかと自問している。その答えは「当時、ちょっと内容の深い会話を交わせるような女性達はほとんどいなかった」からだとして述べている。Montseny, Federica, *Mis primeros cuarenta años*, Barcelona, Plaza&Janés, 1987, p. 135.

⁴⁶ Varela, Juan, “Las mujeres y las Academias. Cuestión social inocente” (1891), en *Obras completas*, Luis Araujo Costa (estudio preliminar), Madrid, Aguilar, 1961, tomo II, pp. 856-68.

女同様に1853年ヘルトルディス・ゴメス・デ・アベジャネーダ(Gertrudiz Gómez de Avellaneda)も女性であるがゆえに入会を拒否されている。この件に関して、パルド・バサンは「アカデミア問題」⁴⁷という論文を執筆し、女性がアカデミアのメンバーになれないという法的な根拠は何もないと述べた。そして、先達のアレナルを「王立倫理科学・政治アカデミア」(Academia de Ciencias Morales y Políticas)のメンバーへと推挙したがこれも実現しなかった。⁴⁸ パルド・バサンはアカデミアのメンバーにはなれなかったが、1916年にマドリード中央大学のロマンス語学科の教授になった。しかし、学生たちも教授たちも女性が教授というポストに就くことを快く思っていなかった。彼女の受け持った科目が必修科目でなかったこともあり、次第に授業に出席する学生は減っていき、授業は中止に追い込まれてしまった。いかに能力があろうが、自分たちの領域であるアカデミアや大学では女性を認めないという当時の世論の現れと言えよう。

むすびにかえて 第一世代のフェミニストとして

フェミニズムのパイオニアであった二人の女性たちには、いくつかの共通点がある。まず、最初にも述べたように、二人ともガリシア地方の自由主義を信奉する裕福な家庭に生まれたということである。女性の置かれている状況を、躊躇せずに自らの言葉で批判し、その改善策をまず女性に対する教育に求めたという点でも共通している。二人とも妻として母としての役割を果たしながら、当時の女性としての生き方—結婚して母になるという—から逸脱することはなかった。そして何よりも、彼女達の「フェミニスト」としての戦いは孤独なものであったという点である。彼女たちに続く世代の女性たちは、執筆や講演を通じて、自らの主張を発表するだけでなく、様々な組織や女性たちのクラブで仲間を募り、活動をした。パルド・バサンに続く人物として、カルメン・デ・ブルゴス⁴⁹があげられるが、彼女も執筆活動の傍ら女性組織を結成した。アレナルの後継者と言える刑法学者のビクトリア・ケントにも多くの女性の仲間がいた。1918年に結成された「スペイン全国女性連合」はアレナルの思想を引き継いでいると言える。この組織の主張は時代の流れに従って変化していくものの、カトリックを容認しつつ、あまり急進的にならずに女性の権利獲得を求めていくという基本的な方針はアレナルの思想そ

⁴⁷ Pardo Bazán, Emilia, “La cuestión Académica”, en Pardo Bazán, 1976, p. 203.

⁴⁸ 最初の女性のアカデミア会員は1932年歴史アカデミアの正式会員(académico de número)となったメルセデス・ガイブロイス(Mercedes Gaibrois)である。王立アカデミアは定員制で、正式会員の他に名誉会員(académico de honor)と特別会員(académico de mérito)というカテゴリーがある。18世紀には芸術アカデミアに12名の女性が名誉会員として、6名が特別会員となっている。言語アカデミアでは、マリア・イシドラ・デ・グスマン・イ・ラ・セルダ(María Isidra de Guzmán y la Cerda)が1784年に名誉会員となった。Campo Alange, *op. cit.*, pp. 245-246.

⁴⁹ カルメン・デ・ブルゴスについては、拙稿「カルメン・デ・ブルゴス(コロンビーネ)のフェミニズムを巡って」専修大学人文科学年報31号, 2001年を参照されたい。

のものである。

アレナルとパルド・バサンの相違点としては、二人の生きた時代背景の違いがある。そんなに年齢は離れていないものの、フェミニズムの進展状況を考えると、19世紀に生涯を終えたアレナルと、20世紀の初頭を生きたパルド・バサンとは違う。熱心なカトリック信者であったアレナルに対して、パルド・バサンはそうではなくカトリック女性にかわる新しい女性像を作り上げていくべきだと考えていた点でも異なっている。パルド・バサンもアレナルも、勉学への強い意欲を持っていたが、アレナルが男装して大学に潜り込んだのに対して、パルド・バサンは独学した。そして、クラウシスモに対する評価も異なっている。アレナルは思想そのものに惹かれたわけではないが、実践面でクラウシストたちと協力していたが、パルド・バサンはクラウシスモに触れたが、幻滅を感じて離れていったらしい。⁵⁰ 二人のいでたちも対称的である。アレナルは大学の授業やテルトゥリアなどに「男装」して参加していたと言われているし、結婚式にも普段の男装で出向いたため、一度は司祭に結婚式をあげることを拒否され、急遽、ドレスを借りたというエピソードもある。婚資のリストにも装飾品はほとんど見当たらない。⁵¹ それに対し、パルド・バサンは貴族の称号を持つことも無関係でないのだろうが、派手な服装で有名であった。⁵²

アレナルやパルド・バサンがフェミニストであったか否かに関しては、議論の別れるところである。アレナルは当時の女性の置かれている状況を非難はしたが、その状況の改善策までは打ち出さなかったし、女性の政治参加を拒絶している点を指摘して、フェミニストではないと述べている。⁵³ 1920年代に『社会主義フェミニズム』という著作を書いたマリア・カンブリルスは、アレナルやパルド・バサンのフェミニズムを「貴族的フェミニズム」と呼んだ。⁵⁴ パルド・バサンもアレナルも女性参政権を求めることはなかった。ただし、当時のスペインの状況を考えると、参政権を求めるか否かは、必ずしもフェミニストであるかどうかの指標にはなりえない。「男子」普通選挙が1890年に実現したものの、カシーケという地方ボスの存在もあり、選挙結果はかならずしも民意の現れではなかった。また、教育を十分に受けていない女性に参政権を与えても、それは、女性の配偶者なり、父親の票を2倍にするだけだとも考えられていた。

アレナルもパルド・バサンも著作や各地での講演を通じて女性の置かれている悲惨な状況を

⁵⁰ Campo Alange, *op.cit.*, p. 129.

⁵¹ Simón Palmer, María del Carmen, *Arenal y Lázaro: La admiración por una mujer de talento*, Madrid, Fundación Lázaro Galdiano, 2002, pp. 13-14.

⁵² Mangini, Shirley, *Las modernas de Madrid*, Barcelona, Ediciones Península, 2001, p. 43.

⁵³ Arredondo, Carmen, "Concepción Arenal: la primera mujer que pisó la Universidad", en *Historia Internacional*, núm.1, abril, 1975, p. 48. この論稿はアレナルの著作をもとにした彼女との仮想インタビューである。

⁵⁴ Cambrils, María, *El feminismo socialista*, Valencia, 1925.

告発し、教育を通じて、女性の地位を高めていこうと尽力した姿勢は、少なくとも、彼女たちが生きた時代のスペインにおいては、フェミニストであったとすることができる。スペインのフェミニズムは、他のいわゆるフェミニズム先進国とは、その背景も成立過程も異なっている。その異なったプロセスと、19世紀から20世紀初頭にかけてのスペインの不安定な政治・社会状況を考慮に入れると、女性の政治参加や参政権行使を求めているか否かはフェミニストであったかどうかの指標とはなり得ない。しかし、パルド・バサンは1899年にソルボンヌ大学に招聘されて講演を行なった際に自らをフェミニストと称している⁵⁵し、死後数十年たって、1920年代のフェミニズム運動の担い手たちが、アレナルを記念する像の建立を目指したのも、アレナルのフェミニストとしての功績が評価されたからであろう。

しかし、次第に彼女らはフェミニズムに幻滅を感じ、離れていった。それは孤立無援の戦いであったことと、19世紀から20世紀初頭の時代におけるスペイン女性の意識覚醒の困難さを敏感に感じとったからであろう。それでも、孤立しながらも少しも躊躇することなく「叫び」続けた彼女達は、スペイン・フェミニズムの先駆者として大きな役割を果たしたと言える。

本稿は専修大学研究助成（2006年度）「スペインのWomanhoodの生成をめぐって」の成果の一部である。

⁵⁵ Campo Alange, *op.cit.*, p. 125.

社会科学研究所 定例研究会 報告要旨

2007年12月18日(火) 定例研究会報告

テーマ： 日タイ経済協力の歴史と現状

報告者： 佐藤正文氏(日タイ経済協力協会 JTECS 専務理事)

時間： 16時00分～18時00分

場所： 社研生田会議室

出席者数 15名

研究会概要

本研究会は、2008年3月中旬実施予定の社会科学研究所春季合宿研究会(タイ)第一回事前研究会として、特に日タイの経済的な相互関係を知るために開かれた。

報告者の佐藤正文氏は、1972年に設立された JTEC(日・タイ経済協力協会)の専務理事として、現在まで日タイ経済関係構築維持に尽力されてきた方である。

報告では、現在の日タイの良好な関係に至る、戦前・戦後両国の人的交流の歴史を振り返りながら、アジア諸国の中で「理想的な」(佐藤氏)現在の人的・経済的な両国のつながりについて論じるものであった。

すなわち JTEC 設立の 1972 年の前史として、1957 年アジア学生文化協会(ASCA)、1960 年アジア文化会館(ABK)設立によるアジア諸国からの留学生支援、および 1959 年海外技術者研修協会(AOTS)設立による日系企業現地雇用者研修支援の体制が整い、さらに 1973 年には ABK と AOTS によるタイの同窓会を母胎とした泰日経済技術振興協会(TPA)がバンコクで設立されるなど、日本とタイの両国で人的交流が蓄積されて、この人的交流が日タイ友好に大きな寄与をしたことが強調された。なお、2007年にバンコクにて泰日工業大学が開校し、日本でも話題になったが、この大学は TPA により設立されたものである。

また報告では、こうした人的交流と共に、ODAによる経済技術援助の実績と日系企業の泰進出の状況についても論じられた。

質疑では、日系企業は下請けも伴ってタイに進出しているが、その際、タイの地元企業の育成や技術振興に寄与することになっているのかどうか、という質問が出たが、これに対して佐藤氏は、一次下請けは確かに日系企業だが、二次、三次は地元企業であり、着実に工業の裾野は広がっているとのことだった。

他にも、泰日工業大学開校に関連してタイでの大学事情、現在の政治状況の展望についてなどの質問があり、それについて佐藤氏の見解や、これら質問についての出席者相互の討論が行われた。

記：専修大学経済学部・村上俊介

2008年1月26日(土) 定例研究会報告

テーマ1) : タイでの日系企業進出状況について

報告者 : 中山喜徳氏 (中山金属株式会社代表取締役社長)

時間 : 14時30分~16時00分

テーマ2) : タイの都市と村落 : 文化人類学の視点から

報告者 : 渡部重行 (所員・経済学部)

時間 : 16時15分~18時00分

場所 : 神田校舎7号館772教室

出席者数21名

報告内容概略 :

テーマ1) について

中山報告は、報告者ご自身の中山金属株式会社のタイへの進出経過と現況を、タイにおける日系企業進出状況についての一事例として提供し、さらにタイにおける他の日系企業あるいはASEANへの日系企業進出の実態へと領域を広げるかたちで進められた。

中山金属の対現地法人設立は1999年であり、ちょうど1997年の通貨危機直後に設立手続きをした。当時は通貨危機直後ということもあり、認可が非常にスムーズに降り、現在まで好調な事業展開をしているとのこと。ただし、現在ではローカル資本比率を高めるよう政府から求められている。日本では規模が小さくとも、タイでは従業員500名を超える企業として事業展開しているところが、タイには数多くあるとのことである。

ASEAN諸国へ進出している日系企業と比較すると、特にタイでは2007年6月現在、前年比で売上高、利益はともに他の諸国のそれを上回っている良好な状況である。現在「仕入れ原価の上昇」に苦慮しているなど原油価格高騰の影響はあるが、今後の展望としては中山氏によれば「ますます日系企業の進出は高まる」だろうとのこと。

報告後の質疑では、現地タイ企業との取引実態如何との質問があり、これに対して中山氏によると、タイの日系企業活動は下請けも含め、ほぼ日系企業同士の取引・競争が実態であることが指摘された。

タイにおける労働力の質についての質問に対しては、山中氏はブルーカラーとホワイトカラーの格差がはっきりしており、ホワイトカラーには女性の優秀な人が目立つこと、また中国系とタイ系では中国系が強いが、中国系はタイにとけ込んでおり、両者の対立というものはないように見えるとのことであった。その他、アジア全体に言える、日本との商習慣の違いなども話題となった。

テーマ2) について

渡部所員は、1998年長期在外研究で一年間タイ東北部に滞在して以来、毎年春には現地に入り、調査を継続している。

報告は、日本と比較したタイの文化的特質についての紹介から始まり、特に渡部所員のフィールドであるタイ東北部（イサン地方）の特性、特に言語・文化面でのラオ人中心のこの地方のタイ語と比べての言語上の違いや大都市バンコクとの違いが紹介された。渡部氏はバンコク居住者には官僚、富裕層、増大しつつあるホワイトカラーが多く、地方出身者と自分たちをはっきり区別し、また地方出身者も、帰属意識はバンコクになく、あくまでも出身地にあるというかたちで、両者に「溝」のあることが指摘された。

報告では、そのほかに、タイにおけるゆったりとした生活リズムと、忙しい日本との文化、意識面での違いについて、写真も交えた実体験から得た興味深い話題も提供された

また近年の近代化による地方社会のひずみ（商品作物の導入や消費経済の浸透）も出ており、これに対する循環型社会と地域的自立に向けた動き（自給農業、朝市、森林の再生）があることを、コンケン県ポン郡の朝市運動の事例の中に見いだそうとしている。

報告後の質疑では、質問者から対全体としては「発展」は必要なのではないか、あるいは自立型農業への移行というのは、難しいのではないかと意見も出たが、渡部氏としては、その発展が生み出すゆがみに対して、別のオルタナティブがあるのではないかという問題意識から、上記のような地域の動きに着目しているということであった。

記：専修大学経済学部・村上俊介

〈編集後記〉

年度末の慌ただしい中ですが、月報2月号をお届けします。今月号の論稿は、一般には、人権活動家として知られるコンセプション・アレナル、同じく作家として知られるエミリア・パルド・バサンを「スペイン・フェミニズムの第一世代」として論じたものです。最近のフェミニズム研究のひろがりを示すものと言えるでしょう。 (K. N)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 内田 弘

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
